

自分が体験して分かったこと

小学校五年

ぼくは、三年生の時にサッカーの練習をしていて、友達と接触してしまって転んで足を骨折してしまいました。最初は、自分が骨折したことが信じられなくて、とつてもショックを受けました。「足をついたら痛いだろうな。」「打ったり、ぶつかったりしたらいやだな。」「どうやって生活していったらいいのか」と、不安な気持ちでいっぱい、歩くのがとても怖かったです。そんな気持ちを抱えながら、ぼくが学校へ行くと、

「大丈夫。一緒に行こう。」

と、先生や友達が体を支えてくれたり、「重いでしょう。わたしが持つよ。」

と、荷物を持ってくれたりして助けてくれたので、不安な気持ちがやわらぎました。ぼくは、とてもうれしかったし、「ありがとう。」という気持ちでいっぱいになりました。そんなふうにして、みんなが支えてくれたので、けがが悪化することもなく、一ヶ月程度で無事に完治することができました。

ぼくは、病気にかかってしまった人や、大きなけがをしてしまった人は、こんなに大変で不安な気持ちになるのだな、と感じました。今までは、けがをしている人を見ても、「誰かが助けてくれるかな。」

「声をかけるのは恥ずかしいな。」と思って、声をかけたり、助けたりすることはできませんでした。だけど、自分がけがをしてみても、少し動くことでも心配になるくらいすごく不安な気持ちになり、友達や周りの人の声かけや、助けがすごく嬉しくて安心することに気付くことができました。

だから、これからは周りの人に「大丈夫。」とやさしく声をかけたいです。不安な気持ちを知っているぼくだからこそ、不安な気持ちを少しでも減らすことができるように、まずは、声をかけるところから始めていきたいです。初めは一人でも、ぼくみたいに気付く人が増えていったら優しい声かけができる人が増えて、みんなが安心して暮らせる町になると思います。みんなが優しい町をつくっていききたいです。